

詩篇119篇97～104節

- 97 どんなにか私は、**あなたのみおしえ**を愛していることでしょう。これが一日中、私の思いとなっています。
- 98 **あなたの仰せ**は、私を私の敵よりも賢くします。それはとこしえに、私のものだからです。
- 99 私は私のすべての師よりも悟りがあります。それは**あなたのさとし**が私の思いだからです。
- 100 私は老人よりもわきまえがあります。それは、私が**あなたの戒め**を守っているからです。
- 101 私はあらゆる悪の道から私の足を引き止めました。**あなたのことば**を守るためです。
- 102 私は**あなたの定め**から離れませんでした。それは、あなたが私を教えられたからです。
- 103 **あなたのみことば**は、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです。
- 104 私には、**あなたの戒め**があるので、わきまえがあります。それゆえ、私は偽りの道をことごとく憎みます。

מִה־אֶהְבֶּתִי תוֹרֹתֶיךָ כָּל־הַיּוֹם הִיא שִׁיחָתִי:
 מֵאִיבֵי תַחֲפִמְנֵי מִצֹּתֶיךָ כִּי לְעוֹלָם הִיא־ לִי:
 מִכָּל־מְלַמְדֵי הַשְּׂפָלָתִי כִּי עֲדוֹתֶיךָ שִׁיחָה לִּי:
 מִזְקֵנִים אֶתְבוֹנֶן כִּי פְקוּדֵיךָ נִצְרָתִי:
 מִכָּל־אֲרָח רָע כְּלֹאתִי רַגְלִי לְמַעַן אֲשָׁמֵר דְּבָרֶיךָ:
 מִמְּשַׁפְּטֶיךָ לֹא־סָרְתִי כִּי־אַתָּה הוֹרַתְנִי:
 מִה־נִּמְלָצוּ לַחֲפֵי אִמְרֹתֶיךָ מִדְּבַשׁ לֶפִי:
 מִפְּקוּדֵיךָ אֶתְבוֹנֶן עַל־כֵּן שָׁנֵאתִי כָּל־אֲרָח־שָׁקֶר:

第十三字「メーム」は、「M」に相当する子音字です。100, 102, 104 節のように接頭前置詞「ミン」として付く場合は、基本的に「～から」を意味しますが、「ミン」の「ン」が二番目の子音字に飲み込まれて（「強ダゲシュ」という点が打たれる）後者が強く発音されるようになります。→「מַ」 「פַּ」

例：「メレク」（王）→「ミンメレク」（王から）

מָה / マー……如何に、どのように、どんなに (97, 103) [感嘆の副詞]

אֵיבֵי (מֵאִיבֵי) / オーイェーヴ (メーオーイェヴァー) ……敵 (98)

כָּל (מִכָּל־) / コール (ミッコール) ……すべて、全体 (99, 101)

זְקֵנִים (מִזְקֵנִים) / ザーケーン (ミズケーニーム) ……古い (100)

מִשְׁפָּטִים (מִמְּשַׁפְּטֶיךָ) / ミシュパート (ミンミシュパーテカー) ……裁き (102)

פְּקוּדִים (מִפְּקוּדֵיךָ) / ピックーディーム (ミッピックーデカー) ……原理、教え、規則 (104)

この箇所全体に漂っている雰囲気は和やかで、詩人の中で主にある深い満足が得られていることが窺えます。その証拠に、この箇所では一度も願いや訴えのことばが出てこないのです。

「あなたのみおしえを愛している」(97 節) という表現には、御言葉を読む詩人のワクワクする心情が表れています。牧師も気をつけなくてはなりません。聖書を開くことが「仕事化」し、自分の心が真に満たされることを求めて読む読み方を忘れてしまう危険性があるからです。朝一番のディボーションも、ただ習慣として読むのではなく、「今日主は私に何を語りかけてくださるのだろうか」という期待をもって聖書を開きたいものです。

103 節では有名な聖句「あなたのみことばは、私の上あごに、なんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです」が出てきます。神学校で教わった下川先生は聖書 1000 回通読を目指しておられますが、私が学生の頃は 600 回台に到達されていました。その先生が書かれた「聖書通読のすすめ」の本の副題は『みことば 蜜よりも甘く』であり、詩篇 119:103 から取られたことばであることが分かります。私の記憶によるならば、調子が悪いときでも聖書を開いてみることの重要性が書かれている箇所がありました。今直面している困難に対する答え、あるいはその困難をチャンスに転じてしまう神の知恵が書かれているかもしれません。大説教者ビリー・グラハムも、神との関係を学ぶために詩篇を、人との関係を学ぶために箴言を、毎日欠かさず読んでいたといます。

- あなたへの仰せは、私を私の敵よりも賢くします。(98 節)
- 私は私のすべての師よりも悟りがあります。(99 節)
- 私は老人よりもわきまえがあります。(100 節)

これらの節では、「敵」「師」「老人」という三種類の人間が引き合いに出されています。「敵」はあることないことを並べ立てて、詩人の退路を絶とうとしました。しかし、悪意ある謀略よりも神のことばの真実に依り頼む道の方が最終的には強いことを詩人は知りました。詩人にもまた「師」と仰ぐラビがいたと思われそうですが、彼から教わってきた如何なる学問や学説にも増して、聖書の御言葉に聞き従うことは優れているという経験をしてきたのでしょうか。これはもちろん「師」を貶めることを意味するのではなく、神との一対一の関係の中で聞き取る「ことば」こそ、人生の揺るがぬ指針であるということです。

「老人」は長い人生の中で経てきた多くの経験により、分別を身につけ、気品という賜物を持っている人が多いでしょう。しかし詩人は、如何に信仰生活の長い人であっても、信仰の初心に常に立ち帰る人には敵わないことを知っていました。自分は何事も知らないとへりくだる人こそ、真に御言葉に聞く耳を持っているのです。

- 私はあらゆる悪の道から私の足を引き止めました。(101 節)
- 私はあなたの定めから離れませんでした。(102 節)

詩人が主の御言葉にかじりついて生きてきたがゆえに、悪の道へ進むところから守られてきたことが綴られています。人は頭の中で巧妙な復讐を企てることができますが、それを行なわない自由、復讐を主の御手に委ねる自由を信仰者は持っているのです。最後の 104 節は、「偽りの道」を選択しない知恵、すなわち「わきまえ」にふれて締め括られます。

私には、あなたの戒めがあるので、わきまえがあります。それゆえ、私は偽りの道をことごとく憎みます。私たちが特に怒りに駆られるとき、どう行動すべきかを御言葉は教えてくれます。私たちが愚かな行動へと進みうるとき、神のことばは私たちを守り、慌てず冷静に判断させてくれることでしょう。